HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	他動性の観点からみた日本語動詞の区分の再検討
Author(s)	張, 琴琴
Citation	研究論集, 24, 219（左）-240（左）
Issue Date	2025-01-24
DOI	https://doi.org/10.14943/rjgshhs.24.l219
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94040
Type	departmental bulletin paper
File Information	14_rjgshhs_24_p219-240_l.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

10.14943/rjgshhs.24.l 219

他動性の観点からみた日本語動詞の区分の再検討

張　　琴琴

要　旨

本論は，主体が動作・行為を実施することで目的語にどのような影響を与えるのかについて，従来の動詞分類を概観したうえで，日本語の自他動詞の分類法を採用し，動作性という概念を用いて意味論的に分類を行ったものである。他動詞を「消滅動詞」と「作成動詞」,「所有関係変化動詞」,「対象変化動詞」,「単なる動作動詞」,「その他の動詞」に分けた。一方で，自動詞を「出現・消滅動詞」と,「動作動詞」,「移動動詞」,「その他の動詞」に分類した。

また，周知の通り，時間や場所を表すものが動詞に限界性を与えることができる。実は,「太郎はリンゴを 3 個食べている。」のように，動詞の前に数量詞を付与して使うことによって,動作の限界性の解釈も生じることがある。そこで，本論はアスペクトのコントロールに数量詞が関わっていると考え，限界性からの動詞分類を提案することも試みた。結果として，本来開始限界を持たないものが開始限界を持つようになり，一方で，終了限界を持たないものが終了限界を持つようになる。さらに，非限界動詞が限界動詞に転じることができるという現象が見られる。合わせて見ると，数量詞の付加によって，6 通りの限界性解釈ができると推測される。

1．はじめに

日本語の動詞分類と言えば，まずアスペクトの観点から「状態動詞」「継続動詞」「瞬間動詞」「第四種の動詞」という 4 類型が金田一（1950）[1] によって分類された。その後，アスペクトの研究が進むに連れ，この動詞 4 類型は奥田（1978），工藤（1995，2014），三原（2002，2022）などの研究者によって批判されてきた。例えば,「濁る」「擦り切れている」などは，時間を要す

[1] 金田一（1950）は金田一（編）（1976）『日本語動詞のアスペクト』に再録されている。なお，本論に取り上げる用例について，出典を明記していない用例は筆者による作例である。

る作用であるから継続動詞だが，「「濁っている」「擦り切れている」は結果持続しか示さない。他方，「目撃する」は瞬間動詞であるはずだが，「本署の刑事が仙台で犯人らしき男を目撃している。」の「目撃している」は結果持続ではない。」と三原（2022：4）で指摘されているように，「ている」を付けると，動詞の語彙的意味の捉え方が変わってくる可能性がある。しかし，「花子は野菜を炒める。」のように，動作主の動作の働きかけによって，対象（目的語）に変化が生じる場合がある。工藤（1995，2014）は，この種の動詞を「主体動作客体変化動詞」と呼んでいる。

ところが，客体にどのような変化が生じるか，また，その変化はどういったものか，そして，物理的であるか，或いは非物理的であるかといった問題について，これまでのアスペクトに関する研究ではほとんど触れられていない。

本論の目的は，従来の先行研究における分類を概観したうえで，動作の〈他動性〉および動作の対象物の〈被動性〉という概念を援用し，日本語動詞の区分を再検討することにある。

2．先行研究における動詞分類の概観

従来，日本語動詞の種類について，限界性の有無，意志の有無，自動詞・他動詞といった観点から議論されてきた。この節では，まず，先行研究における動詞分類をおおまかな年代順に沿って確認していく。その後，本論の考えを示し，代表的な動詞の例を挙げながら考察を行う。

2.1. 金田一（1950＝1976）の分類

「日本語において，アスペクトの観点からなされた動詞分類の嚆矢として，金田一（1950）による動詞 4 分類がある」（三原 2022：3）。金田一（1950）の分類をまとめると以下の表になる。

表 1　金田一（1950）における動詞分類と所属動詞

動詞分類	意味特徴	所属動詞	自・他動詞	例文
状態動詞	時間を超越した観念を表し，「ている」をつけることができない	ある，できる，ござる，見える，話せる，値する，言うなど	自動詞	①机がある。 ②英語の会話ができる。 ③次は銀座四丁目でございます。
継続動詞	動作・作用は，ある時間内続いて行われ，「ている」をつけることができ，その動作が進行中を表す	読む，書く，喋る，歌う，泣く，笑う，降る，吹くなど	他動詞が多い	①本を読む。 ②字を書く。 ③雨が降る。 ④風が吹く。
瞬間動詞	動作･作用を表し，「ている」をつけるとその動作・作用が終わってその結果が残存している	死ぬ，点く，見つかる，止まる，結婚する，卒業するなど	自動詞が多い	①人が死ぬ。 ②電燈が点く。

（次頁に続く）

（表 1 続き）

動詞分類	意味特徴	所属動詞	自・他動詞	例文
第四種動詞	ある状態を帯びることを表し，いつも「ている」の形で状態を表すのに用いる	聳える，する，優れる，おもだつ，馬鹿げるなど	自動詞	①山が聳えている。 ②あの人は高い鼻をしている。

以上の表 1 は金田一（1976：7–26）からまとめたものである（自・他動詞の欄は筆者の判断による）。この分類の問題について，すでに多くの研究者に指摘されているが，例えば，「瞬く」と「瞥見する」のような動詞が「瞬間的な動作を表しながら，一時的な状態変化を表すことができる」ということを金田一自身も気づいていた。しかし，これ以外の問題もいくつか見られる（下線は引用者による。以下同様）。

（1） 上司と部下が本音で話せている割合は 16.6%！「コミュニケーションを改善したい」と考えている人が 8 割以上に。

https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000246.000013602.html

（2） 魔術師クノンは見えている。

（南野海風（著））

金田一（1950）の分類も含め，1940 年代においては可能動詞に「ている」をつけること自体が考えられていなかったようである。しかし，上記の例文から示されるように，可能動詞に「ている」を付加することが可能な場合が存在する。このような言語変化は，主に 1970 年代以降に見られるものである。これにより，「可能動詞＋ている」という構造に対する認識が変化していると推測される。また，「来週の日曜日に札幌駅前通地下歩行空間でサイエンスフェスタがある。」のように，出来事を表す「ある」は状態動詞に所属できるか，というのが問題の 1 つである。さらに，他動詞と自動詞のどちらに相当するかという点について，格助詞「が格」を取るか，「を格」を取るかによって判断しているのか，あるいは意味上の特徴を基準にして判断しているのか，という判断基準を示していない。工藤（2014）にも同様な問題が見られるが，第 2.3 で詳しく説明する。

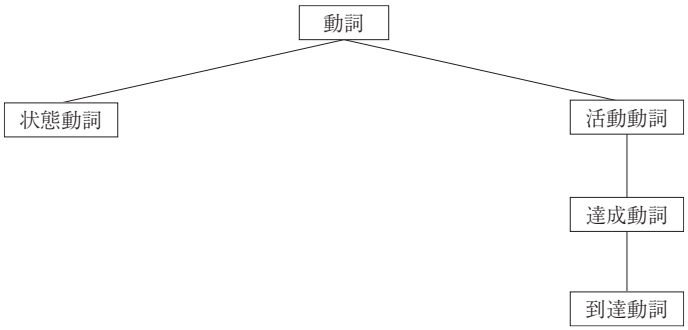
2.2. Vendler（1967）の分類

「アスペクト的見地からの動詞分類と言えば，Vendler（1967）がこれまで最も広範に援用されてきたものであろう」と三原（2022：5）が言っているように，Vendler（1967）の分類は多くの研究者（影山（1996），三原（2022）など）に引用されている。Vendler の分類を以下の表 2 にまとめて示す。

表 2　Vendler（1967）における動詞分類

動詞分類	例
states（状態動詞）	see，know，have，resemble
achievements（到達動詞）	find，lose，die，reach，recognize
activities（活動動詞）	run，swim，push a cart，drive a car
accomplishments（達成動詞）	make a chair，run a mile，paint a picture

Vendler（1967）は出来事の「過程」,「期間」,「終点」といった時間に関わる要素を基準として，英語の動詞を以上の 4 つに分類している（表 2 の括弧は日本語訳である）。動詞は主に，進行形で用いられるか否かを基準に，活動動詞と状態動詞に分けられ，活動動詞は動作・行為の終点を内包するか否かによって，さらに活動動詞と達成動詞に分けられる。そして，時間的幅を持つ行為が終了するまでのプロセスを表す達成動詞の中で，瞬間的に終わるものを到達動詞として区別している。図にすると以下のようになる。



周知のように，Vendler（1967）の分類は金田一（1950＝1976）の分類と重複する部分が多いが，動詞が「限界性」を持つかどうかという考えが大きく異なっている。この点について，三原（2022：3）は「金田一分類は，Vendler（1967）による分類と重なり合う部分もあるが，限界性の基準を前面に押し出していないという点において，むしろ異なる部分の方が多いと言える」と述べている。

また，上記の表 2 から分かるように，Vendler（1967）が動詞を分類する際に，単純に語彙的レベルで捉えておらず，数量詞や副詞といった要素を付けた句レベルで考えている。例えば，「He found it in five minutes.」（Vendler1967：104）のように，前置詞「in」を通じて動作の限界性を表すものが見られる。そして，「drive a car」「paint a picture」のような節レベルのものも所属動詞に入っている。三原（2022：6）は，「push a cart のように目的語が付加されていることからも分かるように，実際には動詞分類ではなく動詞句分類である」と指摘している。つまり，Vendler の分類はそのまま日本語の分類に適用することができないと考えられる。本論は動詞を分類する際，この点について留意したい。

2.3. 工藤（1995，2014）などの分類

金田一（1950）の分類について，当時最初に強く指摘したのは奥田（1978）と言っても過言ではない。奥田は，「ている」だけでなく，「する」もアスペクトの形であるとし，「する」と「ている」を統一するカテゴリーがアスペクトであると主張し，動詞を変化動詞と動作動詞に2分類している。その後，奥田理論は高橋（1985），工藤（1995，2014），須田（2010）などに受け継がれ，さらに具体化されている。この節では主に工藤（1995，2014）の分類をめぐって整理していく。

表3　工藤（1995，2014）における動詞分類と所属動詞

動詞分類	下位分類	自・他動詞	所属動詞
A **主体動作** **客体変化動詞**		他動詞	1）**もようがえ**：暖める，炒める，削る，溶く，煮る，直す，畳むなど。 2）とりつけ：入れる，埋める，積む，注ぐ，挟む，混ぜる，盛るなど。 3）**とりはずし**：落とす，取る，抜く，外す，剥ぐ，ちぎる，除けるなど。 4）**うつしかえ**：上げる，集める，移す，出す，届ける，運ぶ，戻すなど。 5）**生産**：編む，建てる，作るなど。 6）**所有関係**：あげる，預ける，売る，買う，貸す，借りる，払うなど。
B **主体変化動詞**[2]	B・1 主体変化主体動作動詞	自・他動詞	1）**再帰**：かぶる，着る，脱ぐ，穿く，抱く，羽織る，担ぐなど。 2）**位置変化・姿勢変化**：上がる，集まる，移る，帰る，去る，出かける，離れる，寄る，戻るなど。
	B・2 主体変化動詞	自動詞	1′）暖まる，折れる，固まる，乾く，死ぬ，潰れる，冷える，破れる，沸く，汚れるなど。 2′）植わる，隠れる，痩せる，酔う，繋がる，立つ，付く，混ざるなど。 3′）落ちる，取れる，抜ける，外れる，離れるなど。 4′）上がる，集まる，移る，出る，寄るなど。 5′）（**出現・消滅**）現れる，生まれる，建つ，出来る，消えるなど。
C **主体動作動詞**		他動詞が多い	1）動かす，流す，揺する，鳴らすなど。 2）打つ，叩く，つねる，殴る，撫でるなど。 3）嗅ぐ，眺める，睨む，覗く，見るなど。 4）遊ぶ，暴れる，歩く，急ぐ，泳ぐ，喧嘩する，這うなど。 C′）動く，泣く，鳴く，吠える，流れる，吹く，回るなど。 （**二側面動詞**）登る，渡る，転がる，進む，たれる，散るなど。

（次頁に続く）

[2] 主体変化主体動作動詞は，シテイル形式で基本的に〈結果継続〉になる点を考慮して，B主体変化動詞の中に入れておく。また他動詞である主体動作客体変化動詞に対応する自動詞，主体変化動詞になる」と工藤（2014：215）で説明されている。

（表 3 続き）

動詞分類	下位分類	自・他動詞	所属動詞
D **状態動詞**		自動詞 が多い	1）**自然現象**：冷える，吹雪く，流行るなど。 2）**思考**：思う，考える，察するど。 3）**感情**：うんざりする，悩む，迷う，喜ぶ，驚く，困るなど。 4）**知覚・感覚**：感じる，聞こえる，痛む，見える，震える，火照るなど。

工藤（2014）は，①終了，開始の〈時間限界〉のあり様，②客体における変化の有無，③主体の意志性の有無という観点から，運動動詞を〈主体動作客体変化動詞〉，〈主体動作動詞〉，〈主体変化動詞〉，〈主体変化主体動作動詞〉，〈現象（動き）動詞〉，〈状態動詞〉に分けている。そして，他動詞に属するか，自動詞に属するかについて，「主体変化動詞は，主語＝主体の観点から〈変化〉だけを捉えている動詞であり，主体動作客体変化動詞（他動詞）に対応する自動詞は，すべて主体変化動詞になる。主体動作動詞には，他動詞も自動詞も所属する。「歩く，泳ぐ」のような自動詞の場合，主体が〈人〉ではなくなると，意志性が薄れ，現象（動き）動詞に近づく。」と工藤（2014：207-215）で述べられている。しかし，上記の表から，1 つの単語（上がる，集まる，離れる）が 2 つの用法をまたがっているという現象が見られる。これについての説明などは特に見られなかった。さらに，「主体動作動詞」に所属している動詞を見ると，「食べる，舐める，拭く」といった動詞が入っていることが分かる。「食べる」とは，食物を口に入れ，噛み砕いて呑み込み，空腹を満たすということを指し，例えば，「牛肉を食べた。」のように，牛肉を口に入れてそのまま噛まずに呑み込むような食べ方は考えられないだろう。つまり，食物を噛む時点から客体が徐々に変化し始めたというように捉えられる。そうなると，「食べる」は「主体動作動詞」でなく，「主体動作客体変化動詞」の「出現・消滅」を表す動詞に入れるべきである。そして，「飴を舐める。」のように，飴を舐め終わった時点で，客体としての「飴」はすでに元の状態に戻せず，消滅したということになる。この場合では，客体に明らかな変化が起こったのではないかと考えられる。要するに，このまま工藤（2014）の分類を用いることができないことが示唆される。

さらに，加藤（2013：220）で議論されているように，「パンを焼く。」，「ゴミを焼く。」という同じ動詞の働きかけによって，目的語にもたらす変化は異なり，前者は「対象作成」を表し，後者は「対象消滅」[3] となる。つまり，「焼く」という動詞に対して，異なる目的語（客体）と共起する場合，客体に生じる変化が変わる可能性がある。したがって，工藤の動詞分類における所属動詞について，細かく再検討する必要がある。

本論は，工藤の考えを全面的に否定するものでなく，むしろその所属動詞をどのように正確

[3] 「ゴミを焼く。」について，加藤（2006a）では「対象出現」とされている。なお，本論は，基本的に最新の知見を加えたものを参考するため，加藤（2013）を参考にした。

に分類することができるかについて，考え直したものと言える。これについて，第3節で詳しく述べることとする。

また，アスペクトの観点から見た動詞分類について，日本語記述文法研究会（編）（2007）は主に奥田と工藤の分類を踏まえて記述を行い，「動詞には，動き動詞と状態動詞がある。動き動詞はアスペクトを持つが，状態動詞はアスペクトを持たない。」と書いている。動き動詞の分類について，以下のように示しておく（日本語記述文法研究会（編）2007：79）。

表4　動き動詞の分類

動きの時間的性質 / 主体との関わり	継続	瞬間
主体動作	遊ぶ，楽しむ…	一瞥する，預ける…
主体変化	暖まる，成長する…	届く，死ぬ…

継続動詞の主体変化動詞と瞬間動詞の主体変化動詞は，どのような変化が生じるかについて，日本語記述文法研究会（編）（2007：108-113）で詳しく記述されているため，詳しい内容はこれを参照されたい[4]。上記の表4を見ると，工藤（1995，2014）で提案している「客体変化」という概念が取り入れられていないことが分かる。しかし，日本語記述文法研究会（編）（2007：80-81）の「自動詞・他動詞と主体動作動詞・主体変化動詞の関係」では自他がペアになる場合，主体動作動詞と主体変化動詞の対応関係を記述しているが，動詞によって，目的語にどのような影響を与えるのかについてはほとんど触れられていない。例えば，「3個のライチを食べる。」「60頁の論文を書く。」の「食べる」「書く」は他動詞であるが，「ライチ」「論文」に与える影響が異なる。前者はライチが消滅されていくことを表し，後者は論文が作成されることを表す。つまり，主体変化だけに重点を置くのではなく，客体変化も考慮すべきであると考えられる。

2.4. 三原（2002，2022）などの分類

動詞分類について，動詞と数量詞との結びつきという観点から議論したのは三原（1998）などが見られる。三原（2022）は動詞が目的語に対する働きかけや数量詞連結できるか否かという点から，動詞を「強影響動詞」「弱影響動詞」「非影響動詞」「反影響動詞」という4つに分けている。

（3）　a. 子供がおもちゃをもう2つ壊した。

[4] 日本語記述文法研究会（編）（2007）の分類を観察するところ，工藤の分類における客体変化という概念を取り入れていないことが分かる。本論もこの概念を使用しないが，動作の作用による目的語の被動性に重点を置きたい。

b. 僕は書類を午前中に 3 つ仕上げた。

（4） a. ボランティアを被災地に 500 名以上派遣する必要がある。

b. 彼はレンガを花壇に 6 つ積んだ。

（3）（4）の「壊す」「仕上げる」「派遣する」「積む」といった動詞について，三原（2022：90）は，「主語が直接目的語に働きかけることによって，目的語が物理的に（状態または位置）変化を被ることを表す動詞である。他動性が最も高い動詞と言えよう。これらを「強影響動詞」と呼ぶことにしよう。」と述べている。しかし，（4a）は（3）（4b）と異なっている点として，1 つ目は，主語が文に現れていないこと，2 つ目は，述部に出現する動詞は他動詞でなく，存在動詞であることが挙げられる。「ボランティアを被災地に 500 名以上派遣する。」はあくまでも従属節として，後部名詞「必要」を修飾している。つまり，このまま（4a）をほかの例文と同様に扱うことができない。さらに，「派遣する」は確かに他動詞であるが，（4a）を見ると，500 人のボランティアを派遣することは個人規模でできる仕事ではなく，組織規模の仕事と想定できる。そうすると，（4a）の主語もほかの例文と異なる。したがって，「派遣する」は「強影響動詞」であるか否かは再検討する必要がある。

また，三原（2022）は「強影響動詞」の他動性が最も高く，動詞の働きかけによって，目的語の状態と位置に変化が生じると主張しているが，実際に目的語にもたらす変化はこれらだけではなく，ほかにもあることが考えられる。冒頭で述べたように，本論は他動性と被動性の観点から，動詞種類を再検討するものである。そのため，これまで見た動詞分類を踏まえつつ，次節から，自動詞・他動詞がそれぞれと結び付く目的語との意味特性を考察し，新たな動詞下位分類を試みる。

2.5. 他動性と被動性について

自動詞と他動詞の下位分類を行う前に，両動詞に関わる「他動性」という概念について簡単に説明しておきたい。角田（2009：67）によれば，他動性（transitivity）とは自動詞文（intransitive sentences）との関係も含め，他動詞文（transitive sentendes）に関する言語現象一般を指す。一般的に言えば，直接目的語（direct object）を取る動詞は他動性を持ち，その他動性を持つ動詞を他動詞（transitive verb）と言い，一方で他動性を欠く動詞を自動詞（intransitive verb）と言う。従来，動詞とアスペクトの関係（中国語を中心に）について議論を行った先駆的な研究として，Li and Thompson（1981）が挙げられる。そして，プロトタイプ（典型的なもの）的観点から他動性について議論されていた研究も多く，その中で Hopper & Thompson（1980），角田（2009）[5]

[5] 角田（2009）は，角田（1991）の改訂版である。本論は主に最新の知見が加えられた 2009 を参考にする。

などが挙げられる。前者は主に他動性の高低を左右する意味的要素を，後者は二項述語階層を提案している。動詞が他動性を持つ一方で，人や物が動作・出来事によって影響を受けたか否かを問題にすることを「被動性」と呼ぶのが一般的である。例えば，以下の例文である。

（5） 花子は窓を開けた。
（6） 太郎は立っている。

（5）は，花子の動作による働きかけの結果，「窓」が閉まっている状態から開いている状態に変わったという目的語（窓）に生じる変化を表している。これに対して，（6）の「立つ」は自動詞であり，普通他動性を持たず，そして，被動性も有しない。もちろん，誰かの命令で立たされる場合は，他動性を有するかどうか再議論する必要があり，その際は他動性だけではなく，使役性なども考慮しなければならない。

また，加藤（2013：219）は，「を」の対象格と場所格の連続性について議論する際に，動詞の動作・行為によって，目的語にどのような変化が起こるのかについてまとめており，さらに，同じ動詞が異なる目的語と共起する際に，もたらす変化も変わるということについても指摘している。詳細は以下に示す。

表 5　加藤（2013）による動作対象変化の種類[6]

変化	物理的	対象変性	A	肩を負傷する。 石を焼く。
		対象消滅	B	ゴミを焼く。
		対象出現	C	
		対象作成	D	パンを焼く。 台詞を言う。 真実を話す。
	非物理的	関係変化	E	本を買う。 お菓子をもらう。
		意味変化	F	
		感情変化	G	
		認識変化	H	
非変化	物理的	対象動作	I	
		知覚動作	J	富士山を見る。 音楽を聞く。
	非物理的	関係叙述	K	友人を待つ。
		意味叙述	L	
		属性叙述	M	
		感情叙述	N	彼の成功を喜ぶ。 友人の死を悲しむ。

[6] 参考として，筆者が加藤（2013）で言及された例文を表 5 にまとめた。

表 5 から観察できるように，加藤（2013）では「B・F・G・H・I・L・M」の意味用法について，それに対応する例文が挙げてられていない。そして，「30 km の国道を歩く。」のように自動詞に関わる対象の意味特性については取り上げてられていない。しかし，これまで見た研究の中で，動詞の働きかけによる対象の変化について，細かく下位分類を行ったのは加藤（2013）のみである。そのため，本論は，この分類を参考にしながら自動詞・他動詞の下位分類を行う。

3．動詞区分の再検討

動詞の種類と言えば，これまでの研究者によって，日本語の動詞は動作動詞と状態動詞，他動詞と自動詞，意志動詞と無意志動詞，能動詞と所動詞，本動詞と補助動詞，単純動詞と複合動詞，授受動詞，移動動詞などに分けられている。そして，上記で言及した先行研究の概観を通じ，いくつかの異なる観点からの分類が存在することが分かる。本論は，行為を実施することで目的語にどのような影響を与えるかという点から日本語の動詞を大まかに整理しておきたい。

『言語学大辞典（第 6 巻）：890』によれば，動詞の種別を考えるのにはさまざまな観点からなされるが，もっとも普通で，もっとも重要な区分は他動詞と自動詞の区別である。ここでは，他動詞と自動詞という分類法を選択し，それぞれの所属動詞について見ていく。

3.1. 他動詞

動詞は，目的語を取るか取らないかによって二分され，目的語を取らないものは「自動詞」，目的語を取るものは「他動詞」と呼ばれる（『日本語文法事典 2014：255』）。もちろん，周知のように，自動詞の中でも「私は空を飛びたい。」のように，「を格」を取るものが存在するが，この場合の「を格」は対象格ではなく，場所格として扱われるべきである。「を格」について，加藤（2006a，2006b，2013），佐伯（2024）などで議論されているため，詳しくはこれらを参照されたい。本論は，主に対象格の表す「を格」と共起する動詞を他動詞として扱う。そして，議論にあたり，消滅動詞，作成動詞，所有関係変化動詞，対象変化動詞，単なる動作動詞，その他の動詞に分けて見ていく。

3.1.1. 消滅動詞

消滅とは，一般的にこれまで存在していたものが消えてなくなることを指す。この種類に所属する動詞は，食べる，食う，飲む，消す，焼く，燃やすなどがある。以下の例を通じて説明する。

（7）　リンゴを食べる。
（8）　コーラを飲む。

（9） 息を飲む。
（10） 文字を消す。
（11） 電気を消す。
（12） 新聞紙を燃やす。
（13） 事柄に好奇心を燃やす。

『新明解国語辞典（第八版）』（2020）によると，「食べる」とは，一般に口に入れた物を噛んでから体内に収める行為を指す。「飲む」は，口に入れた物を噛まずに喉を通して体内に収める。「消す」は，Ⓐ不要になった時点で，そのものの利用を止める，Ⓑ不要な存在として，取り除くことを指す。「燃やす」とは，Ⓐ燃えるようにする，Ⓑ感情を高まらせ，積極的な行動に出ようとすることを指す。例えば，（7）の「リンゴを食べる。」のように，まず人間にとってリンゴを丸1個呑み込むことはなかなかできない。リンゴを食べる際に，普通一口ずつかじって咀嚼してから呑み込むというプロセスになる。「食べる」という動作が終わった時点で，対象物としての「リンゴ」がなくなる。つまり，ものに働きかける他動詞は被動性が高く，当時存在していた「リンゴ」の姿がなくなったということは，動作を実施した後に，その結果から確認することもできる。言い換えれば，結果と証拠性の認識が関わっており，結果が残れば，その動作の実施にあたって，証拠性を有することになる。しかし，日本語記述文法研究会（編）（2009）では，「食べる」が主体動作（対象無変化）型に入れられている。「読む」「ノックする」は確かに動詞の働きかけがあっても対象物に変化は生じないが，「食べる」はそうではないため，同じタイプの動詞として扱われないと考える。（8）の「飲む」も同様に，物を飲み終われば，その物の姿がなくなるため，結果から確認できる。しかし，「その突然の出来事に，私たちは皆息を飲んだ。」のように，「息」というものを口に入れて飲んだというわけではなく，その「出来事」に驚いて呼吸を止めることを指す。これは一種の比喩的な表現であり，「水を飲む。」と同様に扱うことができない。加藤（2013：220）で指摘されるように，特定の動詞がどの意味になるかが語彙形態ごとに一義的に決まっているわけではない。むしろ，1つの動詞にいくつかの意味が潜在的にあることを認め，解釈上，特定の意味用法が選択されると見るべきである。

また，（10）と（11）の「消す」の意味も異なり，前者は本来紙や黒板などに書かれている文字を消し去ることを指す。一方で，後者の「電気」は実際に消すことができず，これは照明器具を消すことを表す用法から派生した表現だと考えられ，もともとは「電燈を消す。」「蝋燭を消す。」である。つまり，「「消す」という動作の生ずる領域で個別の対象物を代理的に指示している点で換喩であり，指示的厳密性を失っているという意味で粗略化が見られる（加藤 2013：219）」のである。そして，「消す」という動作・行為を実施することで，（10）（11）は結果から確認できるが，対象物の変化から見ると，前者は消滅系と言える一方，後者は非変化的な属性叙述に属するだろう。（12）と（13）の「燃やす」は工藤の分類では「主体動作動詞」に所属す

るが，実際に動作の働きかけによる客体の変化も生じることがあるため，説明せずにそのまま分類すると，妥当性に欠けると言える。

このように，動詞の意味を検討する際に，対象物（目的語）と深く関わっており，本論は，他動詞において，動詞の働きかけによってその対象物がなくなるという意味を表す動詞を「消滅動詞」として扱うことにする。

3.1.2. 作成動詞

「作成」とは，ものを作ること，また書類，文章などを作り上げることを指す。例えば，「ジュースを作る。」「レポートを書く。」この種類に所属する動詞として，書く，作る，握る，編む，建てる，彫る，炊くなどが挙げられる。日本語記述文法研究会（編）（2009）は，「選ぶ」を産出型の動詞に入れているが，動詞の働きかけによって何が出現するかについての説明が見当たらず，仮に多数の物・人の中で 1 つ選択するというのならば，もともと対象が存在しており，あくまでも動作を実施することで対象物の立場あるいは状態・属性が変化したと考えられる。本論では，このような動詞を選択動詞に入れるべきだと考える。

（14）　論文を 70 頁書く。
（15）　冬用のセーターを編む。
（16）　餃子を作る。
（17）　夕食を作る。
（18）　シマエナガの木彫りを彫る。

上記と同じく，まず『新明解国語辞典（第八版）』（2020）に掲載される意味を確認する。「書く」とは，（あとに残すために）表そうとする何かを物の表面に，目に見える形で示すことを指す。「編む」は，Ⓐ糸・竹・髪など細くて長い物を互い違いに組み合わせていって，まとまりのある形の物にする，Ⓑ編む材料を「毛糸を編む。」と表すことも，編んで仕上げた物を「セーターを編む。」と表すこともある。「作る」について，「作る」をはじめ，建造物・物品（芸術作品）などを建造・製造・制作する行為を表す動詞は，その行為が完了した結果作り出されたものを「…を」によって表す。したがってその行為の開始から完了までの時点では，現実には存在しないということになると記述されている。また「彫る」とは，刃物で木・石・金属などの表面に字や平面像を表す（外側を削り，立体像を作り上げる）ことである。

（14）は連用数量詞構文である。「書く」という動作を実施する前に対象物としての「論文」は事前に存在しておらず，動作を終えてから論文が書き上げられ，初めて存在する物となるのが一般的である。本論では，最初に存在しないものが動作の働きかけによって初めて現れるという意味を表す動詞のことを作成動詞とする。前節で「食べる」は物がなくなることを含意し，また，その動作結果から確認することもできるため，一種の証拠性を持つと述べたが，実際に

「書く」も同様に考えられる。「書く」は，物がなくなるに対して，物がそこに存在するということを含意する。そうすると，動作の終了に伴って結果が残り，その結果から確認でき，証拠性があるということになる。しかし，（16）と（17）は違い，前者は物を作成すると言えるが，後者はそのままの意味から作成系とは言えない。「夕食」とは，夕方や晩に取る食事のことを指し，食べられるものではない。それは，本来夕方に食べる料理の意味を拡張して用いられているのである。この修辞技法を「換喩」と言い，「やかんが沸いた。」「晩御飯は火鍋だ。」のように，日常言語の中に多数に使われている。つまり，（17）は「夕方に食べる料理。」を「夕食」で置き換えられている。そうなると，「夕食を作る。」の深層的意味は物を作成することであり，作成動詞に所属するのは問題がない。

3.1.3. 所有関係変化動詞

所有関係について述べているのは工藤（2014），加藤（2013）らが挙げられる。工藤（2014）は，「あげる」「預ける」「売る」「買う」「貸す」「借りる」「払う」などといった動詞を「主体動作客体変化動詞―所有関係」に入れている。加藤（2013）は対象物の所有権の移転が必須的な意味であり，非所有から所有への関係変化を表す動詞，例えば，「買う」「もらう」のようなものを「非物理的―関係変化」に入れている。本節は工藤（2014），加藤（2013）の考えを支持するうえで，動詞の働きかけによって対象物の所有権が移転する意味を表す動詞を「所有関係変化動詞」とする。所属動詞として，「売る」「買う」「もらう」「借りる」「貸す」「配る」「与える」などがある。

（19） 私は車を３台買った。
（20） 誕生日におじさんからおもちゃをもらった。
（21） 先生に言語学辞典を借りた。
（22） 新型コロナウイルス感染症の影響が長引く中，暮らしに困っている学生に食料品のセットを配った。

「買う」は，金を払って対象物の所有権が自分のものになることを意味し，「売る」は代金と引き換えに品物や権利などを他人に渡すということである。基本的にこの種類の動詞は動作・行為を実施しても対象物に物理的変化が生じることがない。もちろん，前にも述べたように，「喧嘩を売る。」「元気をもらう。」「怒りを買う。」という場合では，対象物に直接に作用しておらず，何かが間接的に起こっていることを表す。したがって，所有権移転という意味を表す時と同一視することはできない。

3.1.4. 対象変化動詞

対象変化動詞とは，ある行為を実施することで，その対象物の性質が変わるということである。例えば，「スプーンを曲げる。」の「曲げる」は，まっすぐな物などをまがった状態にする

のを意味する。つまり，動作の働きかけで「スプーン」の性質が物理的に変化した。このほか，「溶かす」「壊す」「伸ばす」「温める」「茹でる」「割る」などがある。

（23）バターを溶かす。
（24）腹を壊す。
（25）おもちゃを壊す。
（26）ミルクを温める。

（23）は，固まっているバターを加熱で液状にすることである。つまり，物質が固体から液体へと変化するプロセスが想定される。化学的には，物質の状態が温度の影響で変化する現象を状態変化と呼ぶ。しかし，「腹を壊す。」と「おもちゃを壊す。」との意味が異なる。前者は体に良くないものを食べたことで，腹の具合を悪くする意味を表し，後者はおもちゃの元の形が崩れてしまうことを意味する。どちらかと言えば，後者の意味は対象変化動詞に属する。

3.1.5. 単なる動作動詞

この種類の動詞は，動作・行為を実施するにも関わらず，対象変化は発生しない。したがって，他動性を持たないことが一般的である。いわゆる，直接目的語は存在するものの，目的語に対する物理的働きかけを感じない動詞，つまり非影響動詞（三原 2022：91）のことを指す。「勉強する」「習う」「見る」「聞く」「習得する」「学ぶ」などの動詞はこの種類に属する。

（27）日本語を勉強する。
（28）アメリカに留学したのを機に，英語を習得した。
（29）毎週日曜日に大河ドラマ「光る君へ」を見る。
（30）ラジオを聞く。
（31）音楽を聞く。

「勉強する」「習得する」「学ぶ」といった動詞は他動詞であるが，動作によって目的語に及ぼす影響がほとんどない。つまり被動性があまりなく，単なる動きを表す動詞の一種に過ぎない。「見る」「聞く」は認識行為（加藤 2013：220）を表し，動作を実施しても対象物が変化しないため，本論では，このようなものも単なる動作動詞に入れることにした。（30）と（31）は同じ動詞「聞く」を用いているが，実際に「ラジオ」は家電の 1 つであり，本来であれば聞くことはあり得ないはずである。これも前述の通り，「ラジオの中から流れてくる音声」の代理として「ラジオ」で置き換えている。この現象について，換喩という修辞法だけに関わっておらず，加藤（2013）によると，「指示の粗略化という面がある」という語用論的にも関わっている。

3.1.6. その他の動詞

日本語において，上記で触れた動詞以外，①接触動詞：殴る，掻く，打つ，叩くなど，②心理動詞：心配する，愛する，楽しむ，覚えるなど，③発言動詞：言う，話す，喋るなど，④思考動詞：思う，考えるなどが見られる。これらの動詞は他動性がほとんどなく，動作を実施することで目的語に大きな影響を与えることはない。例えば，(32) のように，「同級生を殴る」というのは，動作主体からの動作の影響を受けた同級生は痛みを感じたりするが，物理的な変化が生じないのが一般的である。本研究では，このような物理的な変化が発生しないものを「その他の動詞」に分類する。

(32) 太郎は同級生を殴った。
(33) 日本に留学している娘を心配する。
(34) 数学の問題を考える。
(35) 日本語を話す。

3.2. 自動詞

目的語を取る他動詞に対して，自動詞は目的語を取らないのが一般的である。しかし，日本語において，「空を飛ぶ。」「公園を散歩する。」「大学を卒業する。」「桜吹雪の中を歩く。」のような現象が見られる。これらの「を」について，従来の研究では，移動の場所，空間，経路，状況といった用法を表していると明らかになった。本論は，自動詞が被動性を持たない観点から，「出現・消滅動詞」「動作動詞」「移動動詞」「その他の動詞」に大まかに分けて検討していく。

3.2.1. 出現・消滅動詞

「出現・消滅動詞」という用語は工藤 (2014) を引用したものである。これに所属する動詞は「現れる」「生まれる」「建つ」「出来る」「消える」などがある。しかし，全ての動詞が必ずしも「出現・消滅」という用法を持っているとは限らない。例えば，以下の例である。

(36) 日本語ができる。
(37) 車の運転ができる。
(38) 家の近くに新しいデパートができた。

本来ないものが現れてくることを「出現」と言い，本来あるものがなくなることを「消滅」と言う。つまり，工藤 (2014) における「出現動詞」は (38) の場合を指すと考えられる。元々家の近くにデパートがなかったが，建設計画から竣工までのプロセスを経て，デパートが現れた。この場合の「できる」を「出現動詞」に入れることは問題がない。しかし，(36) (37) は

人間の能力を指しているため，明らかに所属動詞として相応しくない。つまり，説明せずにそのまま出現動詞として扱うことは混乱を起こす可能性が大きい。

既に説明したように，1 つの動詞にはいくつかの用法があり，どの用法から分類するかによって，種類が変わってくる。本論では，主に存在しないものが出現してくる用法と，本来存在するものがなくなっていく用法を表す動詞を「出現・消滅動詞」とする。典型的な所属動詞として，「生まれる」「現れる」「出現する」「消える」「なくなる」「消滅する」などが挙げられる。

（39）　昨日の夜，子猫が 4 匹生まれた。
（40）　しばらくして炎が消えた。

この種類の動詞も，原則に動作の結果から確認ができるため，証拠性を有すると言える。

3.2.2. 動作動詞

奥田（1977）は，金田一（1950）分類を批判し，動作動詞と変化動詞を提案した。動作動詞として，「読む」「書く」「聞く」「飲む」「遊ぶ」「泳ぐ」「走る」「降る」などが挙げられ，他動詞か自動詞かについて特に区別されていなかった。工藤（2014）の「主体動作動詞」の所属動詞を確認したところ，自・他動詞が混在するという現象も見られる。本論は，自・他動詞を分けて見るため，本節では自動詞の動作動詞について簡単に説明する。

（41）　週末，友達と一緒に白い恋人パークで遊ぶ。
（42）　彼女は迷子になったこどもを見つけたとき，安堵で泣いた。
（43）　230 km の国道 20 号を走る。
（44）　国道 20 号を 230 km 走る。

自動詞の動作動詞は主に動作主体の動きを表し，目的語を取らないため，被動性もない。（43）と（44）は「を」を取っているように見えるが，これは目的語の「対格」ではなく，「場所格（加藤 2013）」に当たる。そうなると，数量詞遊離という観点からこの 2 つの例文を対象に議論することは適切ではないと考えられる。その理由は，数量詞遊離は通常「が格」と目的語を表す「を格」の場合のみに許されるという点にある。場所格と数量詞遊離の問題について，今後の課題とする。

3.2.3. 移動動詞

本節で見るのは「移動動詞」である。移動とは，ある場所からほかの場所へと位置を変えることを指し，例えば，「走る」「歩く」「飛ぶ」「行く」「来る」「戻る」「帰る」「出る」「入る」「渡る」などである。本論では，これらの動詞を移動動詞と呼ぶ。

（45） 太郎が歩く。
（46） 太郎が廊下を歩く。
（47） 国道 20 号を走る。
（48） 背中に痛みが走る。
（49） 彼女は急に頭痛が走り，倒れてしまった。
（50） 想像が次から次へと膨らみ筆が走った。
（51） プールで泳ぐ。
（52） 海中を泳ぐ。

本来自動詞は「が格」しか取らないことを既に前節で確認したが，上記の例を観察すると，（46）（47）（51）は「を格」を取っている。そして，（48）（49）（50）は「が格」を取っているが，動詞の意味から見ると，移動を表しているわけではない。単なる太郎の動作・行為を表す（45）に対して，（46）は具体的な場所を明示しており，この場合では，廊下の起点と終点を想定でき，ある意味では開始限界と終了限界を持っていると言える。（48）（49）は痛みのような感覚が突然に現れてくることを指す。一方で，（50）は筆自体が勝手に移動したのではなく，動作主体が文章をすらすらと書き進めることを指している。つまり，「筆が走る。」の「筆」は擬人化されており，このことを「擬人法」と言う。例えば，「空が泣いている。」などが挙げられる。

このように，移動動詞においても，１つの動詞が何種類の用法を持つものがあり，どの用法が単なる移動に当たるか，どの用法が擬人化される場合に用いられるかという問題について，格助詞との関係だけを考えることができないことが示唆される。

3.2.4. その他の動詞

自動詞について，上記で述べたもののほか，感情動詞や心理動詞などが挙げられる。感情動詞を用いる際に，下記の例から観察できるように，「が格」を取るだけではなく，「に格」と「を格」を取る現象も見られる。

（53） いのちに驚く対話―死に直面する人と，私たちは何を語り合えるのか。
（岡田圭著（2024））
（54） 鳥の鳴き声が聞こえる。
（55） 病気に苦しむ患者の弱みにつけ込んだ。
（https://www.yomiuri.co.jp/national/20230626-OYT1T50043）
（56） 彼からのプレゼントにとても喜んだ。
（57） 友達の成功を喜びたい気持ちでいっぱいだ。

本論は，これらの動詞と格助詞との関係を探る目的ではないため，このような現象が見られることを指摘するにとどめる。また，心理動詞について，三原（2022：33-67）を参照されたい。

4．限界性からの動詞分類試案

これまで主に意味論的視点から動詞分類を行ってきた。動作の開始限界や終了限界について，所々で触れたが，詳しく説明することができなかった。そこで，本節で動作の限界性という観点から動詞分類を試みる。まず，限界性（telicity）とは，ある種の動詞は必然的な終了点を有する出来事を表す。「（洗濯物が）５分で乾いた」などの場合，５分でその終了点に達したと言える。このような点を，限界点（telic point）といい，限界点を持つ動詞を限界動詞（telic verb），持たない動詞を非限界動詞（atelic verb）という（『日本語学大辞典：18』）。

（58）　1 時から 2 時まで歩いた。
（59）　札幌駅から北大正門まで歩いた。
（60）　13 時から 15 時まで泳いだ。

日本語において，「死ぬ」「乾かす」のような限界動詞があり，「待つ」のような非限界動詞もある。上記例文の自動詞である移動動詞「歩く」は基本的に限界を持たないものであるが，時間や場所を付加することで，開始限界と終了限界を持つようになる。動作動詞である「泳ぐ」も同じである。しかし，「遊ぶ」は「１時から２時まで遊んだ。」のように，時間を表す要素を入れると文として成立するが，「札幌から小樽まで遊んだ。」とは言えない。つまり，時間は場所より，動詞に限界性を与えやすい。そうなると，動詞には元々開始限界と終了限界を持つものと，両方のいずれかしか持たないもの，そもそも限界性を持たないものという 4 通りがあると言える。

しかし実際は，時間や場所を表す要素を付与することによって，動詞に限界性的解釈が発生するほか，文に数量詞を加えることで，元々非限界動詞が開始限界や終了限界を持つことになる。

（61）　太郎はライチを食べている。
（62）　太郎はライチを 10 個食べている。

（61）の「食べている」は進行状態を表し，いつ食べ始めたか，いつ食べ終わるかがわからないため，開始限界と終了限界を持たない。つまり，限界性がないのである。しかし，「10 個」という数量詞を入れることで，「10 個食べ終わった」という意味解釈になる。「ている」は 1 個，２個，３個…10 個と増え，今 10 個食べ終わったという結果状態を表す。よって，この場合の

「ている」は完了のアスペクトを表す。従って，数量詞がアスペクト性をコントロールすることができると推測される。

(63)　ペンが机から落ちた。
(64)　飛行機が 10000 メートルのところから落ちた。

従来，「落ちる」は瞬間動詞だと言われている。「机から落ちる」という場合，確かにものが落ちるのが速く，一瞬として認めやすい。しかし，「10000 メートルから落ちる」は，すぐに着地することができず，ある程度の時間が必要である。そうなると，継続する動詞と言うことも可能である。数量詞「10000 メートル」を付与することによって，元々終了限界を持つ「落ちる」が開始限界を有することになり得る。

(65)　今朝，子牛が 2 頭生まれた。
(66)　家庭料理を 3 品作った。

自動詞「生まれる」と他動詞「作る」は出現動詞である。一般的になかった状態からある状態に転じると意味し，特に終わりがない。しかし，数量詞を付加することで，動作の終点が発生し，終了限界を持つことになる。つまり，元々開始限界を設けやすい出現動詞が数量詞のコントロールによって終了限界を有することになる。このように，時間と場合を表すものが動詞に限界性を付与することができる以外，数量詞も動詞の限界性に関わっていることが分かる。そして，数量詞の働きによって，本来限界性を持たない動詞が開始限界と終了限界，あるいは両方のいずれかしかないという解釈になり得る。論理的に言えば，数量詞によって，動詞の限界性解釈は本来の 4 通りから 6 通りまで増やすことが可能である。または，「3 羽のニワトリを殺した。」のように，数量詞の付加によって，本来ぼんやりとした限界性を顕著化させることができると考えられる。表に示すと，以下のようになる（「○」は本来の限界を表し，「●」は数量詞付加によって生じる限界を表す）。

表 6

		①	②	③	④	
論理的なパターン	開始限界	○	○	—	—	
	終了限界	○	—	○	—	

		①	②	③	④	⑤	⑥
数量詞の付加によるパターン	開始限界	○	○	●	●	—	●
	終了限界	○	●	○	●	●	—

なお，紙幅の関係上，数量詞はどのようにアスペクトをコントロールするかという点と，限界性が具体的にどのように 6 通りに変化したのかという詳細な説明について，十分に論じることができなかった。今後，稿を改めて論じたいと思う。

5．おわりに

本論は，主に先行研究を概観したうえで，日本語の動詞を自動詞と他動詞に分け，それぞれの下位分類に所属する動詞について具体例を挙げながら考察した。そして，数量詞の追加によって，動詞の限界性が変化するという視点から動詞分類の試案を提案してみた。しかし，言語事実の指摘にとどまり，その要因の究明にまで至っていないところが多い。例えば，動詞と数量詞遊離の間にどのような関係を持つか，また，数量詞構文において，動作量について議論する際に，自・他動詞と共起する場合の意味が同様であるかといった問題に関して，今後，更に考察を続けていきたいと思う。

（ちょう　きんきん・言語科学研究室）

参考文献

奥田靖雄（1977）「アスペクトの研究をめぐって―金田一的段階―」『ことばの研究・序説』むぎ書房.
奥田靖雄（1978）「アスペクトの研究をめぐって（上）（下）」『教育国語』53 号-54 号.
影山太郎（1996）『動詞意味論』くろしお出版.
加藤重広（2006a）「対象格と場所格の連続性：格助詞試論（２）」『北海道大学文学研究科紀要』，118, pp.135-182.
加藤重広（2006b）『日本語文法 入門ハンドブック』研究社.
加藤重広（2013）『日本語統語特性論』北海道大学出版会.
角田太作（1991）『世界の言語と日本語 言語類型論から見た日本語』くろしお出版.
角田太作（2009）『世界の言語と日本語 改訂版―言語類型論から見た日本語』くろしお出版.
金田一春彦（1950）「国語動詞の一分類」『言語研究』第 15 号，pp.48-63.
金田一春彦（編）（1976）『日本語動詞のアスペクト』むき書房.
工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテクスト』ひつじ書房.
工藤真由美（2014）『現代日本語ムード・テンス・アスペクト論』ひつじ書房.
佐伯暁子（2024）『日本語助詞「を」の研究』ひつじ書房.
須田義治（2010）『現代日本語のアスペクト論』ひつじ書房.
高橋太郎（1985）『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』秀英出版.
高橋太郎（2003）『動詞九章』ひつじ書房.
日本語記述文法研究会（編）（2007）『現代日本語文法３　アスペクト・テンス・肯否』くろしお出版.
日本語記述文法研究会（編）（2009）『現代日本語文法２　格と構文・ヴォイス』くろしお出版.
三原健一（1998）「数量詞連結構文と「結果」の含意【上】【中】【下】『月刊言語』６月号-８月号.

三原健一（2002）「動作類型とアスペクト限定」『日本語文法』2-1，pp.132-152.
三原健一（2022）『日本語構文大全 第Ⅰ巻 アスペクトとその周辺』くろしお出版.
Hopper&Thompson（1980）*Transitivity in Grammar and Discoure*, Language56(2), pp.251-299.
Li, Charles and Sandra A. Thompson（1981）*Mandarin Chinese*: A Functional Reference Grammar. Berkeley: University of California Press.
Vendler, Zero（1967）*Linguistics in Philosophy*, Cornell University Press.

辞典類

亀井孝ほか（編）（1995）『言語学大辞典 第6巻 術語編』三省堂.
日本語文法学会（編）（2014）『日本語文法事典』大修館書店.
日本語学会（編）（2018）『日本語学大辞典』東京堂出版.
山田忠雄ほか（編）（2020）『新明解国語辞典 第八版』三省堂.

【謝辞】

本稿を成すにあたり，多くのご教示を賜った加藤重広先生に深く御礼申し上げます。本文の文責はすべて筆者にあります。なお，本研究は，JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2119 の支援を受けたものです。